1992年1月28日第三種郵便物認可

病院探検隊
第３弾！

“かかりつけ医”を考えてクリニックを探検

川井田　祥子

これまでに入院施設のある病院を訪れてきた病院探検隊ですが、今回は探検をきっかけに患者とかかりつけ医の関係を考えようと、大阪府八尾市にある松尾クリニックを訪れました。

患者の視点に立った診療

8月1日、午前の診療が終わったクリニックへ伺いました。参加者は8名（ボランティア6名、COMLスタッフ2名）。にこやかに院長の松尾美由紀さんが出迎えて下さり、クリニックの職員と患者会の方5名と顔合わせ。ひととおり診察室・検査室や設備を見せていただいた後、待合い室でテーブルを囲みまずは院長のお話を聞きました。

開業は'85年、職員11名を抱え、現在の外来患者数は1日約120名、在宅ケア患者数25名です。

診察は、防音装置の施された診察室で患者さんと松尾さんだけで行われます(*1)。プライバシーが守られることで患者も安心して心を開けるのでしょう。「医療を行う上で一人ひとりの患者さんの生活背景を知ることがいかに大切か気づかされた」と松尾さんはおっしゃっています。

また松尾さんの朝は早く、毎日7時半には連絡を取り合っている病院へ出かけます。自分が診ていた患者さんが入院後に落ち込んでいたら……顔を見せて安心してもらいたい、また退院後のフォローのために常に病状を把握しておきたいと思って2ヵ所の病院へ交互に出かけています。いまでこそ“オープンシステム”(*2)ができ堂々と病室へも出入りできますが、以前は「何をしに来たんだ」という病院職員の冷たい目で見られることもしばしばで落ち込むことも。そんな自らを励ます意味で、自宅から病院へ向かう車の中で聴くのは「ロッキーのテーマ」とか。またご自身のモットーは「医療は体力と愛」だそう。何にでも楽しみを見つけ、自分で自分をその気にさせてがんばれるのはこのあたりに秘訣があるのでしょうか。

松尾さんのテーマ

納得できる医療

①「質の高い医療を」

・病院規模と同レベルの上部消化管内視鏡、カラードップラー装置などクリニックではぜいたくともいえる装置を設置。また近隣の病院との連絡も密にし、MRI・CTなどの検査がスムーズに行えるようにしている。

・投薬内容がわかるように薬の名前・1日の服用量を書いた“薬剤服用カード”を慢性疾患の患者さんに渡したり、慢性疾患の患者さんには携帯用の既製のノートを渡して自分で健康管理ができるようにし、患者と医療者の双方の努力によって質の高い医療を行えるようにしている。

②「親身になった在宅診療を」

・十分に話し合いを重ね、患者さんを在宅で支えきれるかどうかの見極めを行う。患者自身の意思はもちろん家族の理解と協力が得られるかを判断した上で、さらに在宅での医療には限界があることを家族に了解していただき在宅にふみ切る。

・診療時間以外の夜間や休日でも常に連絡がとれるようにと、クリニックの電話は松尾さんのポケットベルや自宅に転送できるようになっている。

③「交流の中で患者さんが主体的になれるように」

・「松樹会」という患者会を組織し、リハビリと積極性を養うために七宝焼・手芸・書道などの教室を開いている(*1)。

●患者会活動で患者もいきいき●

次に患者会の方々からお話を伺いました。5名の方はみなさん開業当初からのおつき合いで、松尾さんとはなんでも言い合える関係だそうです。「夜中でもすぐに飛んで来てくれると思うと一人暮らしでも安心。その安心感が健康につながる」「クリニックへ来て松尾さんの顔を見るだけで元気になる」とのこと。また患者さんが趣味を生かして各教室の先生役になるなど個人の持っている能力を最大限発揮しています。単に患者としてクリニックに来ているだけではなく、そこに生きがいを見つけていることで主体的になれるのではないかと思いました。

慢性疾患を抱えながらも「いまが青春です」「松尾さんが次にどんな新しいことを提案するかと、それが楽しみです」と前向きで、いきいきしていらっしゃいました。

そしてみなさんが、「お任せしています」「いのちを預けています」と言われた言葉も、従来のパターナリズム（父権的恩情主義）でとらえていた“受け身”の意味ではなく、十分対話を重ね自分が信頼できる松尾さんだからこそ“最期のときは……”と選択し自分で決めた、という確信からとお見受けしました。

お互いの役割を自覚し、自分の責任をきちんと果たす意思を持った言葉がとても新鮮に感じられました。

●積極的な“かかりつけ医”探しを●

事前に探検隊メンバーの中で「かかりつけ医に望むことは？コミュニケーションのとり方は？」などを話し合ったのですが、大半は「実際に信頼できるかかりつけ医を探すのは難しい。患者としてどういう働きかけをすれば、よりよい関係が築けるのだろうか」との意見が出ていました。

中学生時代からの親友が陰の大黒柱

患者会は現在約250名を数え、連絡だけでも大変なのに年間行事をこなしていけるのは良きパートナーがいるからです。その方は中学時代からの友人、ボランティアの川崎佐智子さん。息子さんと一緒に事務作業をこなし、患者会活動を支えています。川崎さんは「何を始めるかわからないのでハラハラしっぱなし。黙って見ていられない」と思わず手を出してしまったそう。いまでも「さっちゃん」「みい」と呼び合っています。素顔の松尾さんであり続けることが信頼関係を保ち、「応援したい」と周囲の人を思わせてしまう理由でしょう。松尾さんも「自分がこれだけがんばっているのだから」と周囲に押しつけないように常に気をつけていると、協力関係を大切にしていらっしゃいます。

探検を終えたメンバーからは「遠慮せずに思ったことを伝えてみよう」「ネットワークをもっているかかりつけ医を探していきたい」「“交流”することと“継続性”が大切だと実感した」「患者も自分の健康管理には責任を持ち、医療者との協力が必要」などの感想が寄せられました。

また“かかりつけ医”との関係を考えれば、一人のドクターと信頼関係を築いたとしても、何らかの事情で診てもらえなくなることがあるかも知れません。そんな場合でも「前のドクターは良かった」と不満を並べるだけでなく、新たに信頼できるドクターとの関係づくりに努力することが患者にも必要でしょう。そのためにも遠慮したり甘えたりせずに、常に自分の納得の基準を見つめ直す冷静さが、主体的な医療参加につながるのだと思います。

今回の探検隊の反省点は、ディスカッションだけに終わってしまったことです。次回からは実際の診察の流れを体験できるものを取り入れたいと思います。

＊1　詳細はニューズレターNo.45にて紹介

＊2　患者が入院した病院にかかりつけ医（開業医）が自由に出入りし、検査や治療を行って診察ができることをさし、システムを実施している病院を開放型病院という。'94年10月やっと八尾市の民間病院にも開放型病院の承認がおり、一部ですが開業医が登録医として診察できるようになりました。